

巻 頭 言

「2005 年度活動を振り返って」

群馬大学教授、CAUA運営委員長

金森 吉成

5回目となったCAUA合同研究分科会の基調講演では、東京大学情報基盤センターの安東孝二先生が「スパムの現状と対策」についてお話になった。安東先生は、いつもタイムリーな話題を提供してくれるので本研究分科会を盛り立てるCAUAにとって欠かせない会員になっている。周知のように、スパムに日常悩まされている人は多い。私も受け取る全メールに占めるスパムの割合が最近急速に増えている。安東先生の講演によれば、世界では60%がスパムであるとのことであるが、私の受け取るメールでのスパムの割合はそこまで至っていないように思っている。しかし、私はやってきたスパムをせっせと使用しているウイルスバスターに登録して次回からは同一スパムはフィルターにかけているつもりであるが一向に減らないのが現状で、私のところに来るまでに除かれる分を考えると60%を超えているかもしれない。数日間の出張から帰り、パソコンに向かうと憂鬱になる場合がある。出張中はノートパソコンを使用してメールを見ているが、メールは大学のサーバに残っているので大学のパソコンを起動すると大量のメールがダウンロードされてきてノートパソコンで見たスパムと再度戦うはめになるからである。現在、有効ないろいろ対策をしたとしても“できるところからこつこつとする”との先生のお話であるから、当分の間戦いは続く覚悟をしなければならない。

第5回CAUA合同研究分科会では、その他にも、フェリス女学院大学情報センターの内田奈津子先生が「GISを利用した大学と地域の連携」として大学の地域貢献の事例を発表した。情報の公開・非公開の問題の難しさ、今後継続的に運営するに当たっての人手、費用など具体的な実践例を通して、地域と大学の連携の仕方を模索していくことになると思われる。また、大学でのIT教育について、湘南工科大学メディア情報センター長の坂下善彦先生が「進捗別授業の可能なIT教室の構築」を発表された。様々な能力を持つ学生を一律な対応で賄いきれないことは、もはや大学では常識になっている。問題は、議論ではなくこの事実とにかく早く対応策を立ててそれを実施するかである。湘南工科大学では、すばらしいIT実習教室を構築してこの課題の解決を図ろうとしている点が大変参考になる。かなりの投資が必要であり、簡単にどこの大学でも真似はできない。大学執行部の意気込みが伝わる内容であった。

その他、本年度は、初夏にはCUA（CTCの企業ユーザ会）と共催のエグゼクティブフォーラムが、暮れには九州を会場としたCAUAシンポジウムが開催され、それぞれ成果を上げている。来年度もCAUAが更なる発展を続けることを願うばかりである。